

野生動物における重症熱性血小板減少症候群（SFTS）ウイルス 抗体保有状況調査結果（令和５年度）

1 概要

人獣共通感染症の一つである「重症熱性血小板減少症候群（SFTS）※」は、西日本を中心に感染者報告数が年々増加傾向にある。

福岡県では、感染拡大の要因の一つとして考えられる野生動物を対象とした「SFTS 感染状況調査」を令和４年度から実施している。

※ 重症熱性血小板減少症候群（SFTS）

主に SFTS ウイルスを保有するマダニに刺咬されることで感染する。

発熱、頭痛、筋肉痛、神経症状、消化器症状、呼吸不全症状などが症状として現れ、致死率は 10～30%程度とされる。

2 令和５年度調査内容

福岡県内で有害鳥獣捕獲や狩猟により捕獲された野生動物から血液を採取し、SFTS ウイルス抗体の保有状況を検査した。

（国立感染症研究所の検査手順に準拠）

(1) 検体種別

シカ及びイノシシの血清

(2) 調査数

149 検体（シカ 74、イノシシ 75）

3 最終検査結果

令和５年度に実施した野生動物における SFTS ウイルス抗体保有状況調査の結果については下表のとおり。

表 福岡県における SFTS 感染状況調査結果（令和５年度）

	シカ	イノシシ
陽性 ^a	30 検体	16 検体
陰性 ^b	44 検体	59 検体
陽性率 ^{a/(a+b)}	40.5 %	21.3 %